



Multi-Verb Sequences in English: Their Classification and Functions

Matsumoto, Noriko

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2016-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6361号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006361>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

日本語要旨
英語の複数動詞連鎖：分類と機能
松本 知子 (051L102L)

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

Multi-Verb Sequences in English: Their Classification and Functions

(英語の複数動詞連鎖：分類と機能)

氏名：松本 知子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 松本 曜 教授
(副) 岸本 秀樹 教授
(副) 鈴木 義和 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本稿は、言語の本質は動的 (dynamics)であり塑性 (plasticity)であるという立場をとり、英語の「複数動詞連鎖 (multi-verb sequence)」の性質を、分類と機能を中心に、統語的、意味的、機能的、そして歴史的観点から多角的に論じたものである。英語には、(1)-(4)に示すように、4種類の複数動詞連鎖があり、本稿ではその4種類に対して、the *V-to-V* sequence, the *V-and-V* sequence, the *V-V* sequence, そして the *V-Ving* sequence という用語を用いる。

- (1) the *V-to-V* sequence:
 - a. I like to put lots of ketchup on my fries.
 - b. He went to see 'Twelfth Night'.
- (2) the *V-and-V* sequence:
 - a. You'll have to wait and see what happens.
 - b. He went and bought thirty doughnuts.
- (3) the *V-V* sequence:
 - a. He helped organize the party.
 - b. Go wash your hands.
- (4) the *V-Ving* sequence:
 - a. My father always enjoyed playing golf at weekends.
 - b. He went sobbing up the stairs.

そして、本稿で扱う複数動詞連鎖は、(5) のように定義される。

- (5) 第1動詞は、いつも単独の動詞である。
第2動詞は、単独の動詞か、あるいは動詞句の中の動詞のどちらかである。
第1動詞と第2動詞の間に、コンマ、あるいは名詞句のいずれも入らない。

本稿には2つの大きな目的があり、1つは、統語的、そして意味的観点からの「複数動詞連鎖の総分類 (the general classification of multi-verb sequence)」を行うことであり、もう1つは、4種類の個々の複数動詞連鎖の特徴、そして4種類の複数動詞連鎖の関係性を多角的観点 (統語的・意味的・機能的・歴史的観点) から明らかにすることである。複数動詞連鎖の総分類に関して、統語的観点から、複数動詞連鎖は、2つの動詞句から成る「完全統語構造グループ (full-syntactic-structure group)」と単節(a single verb phrase)から成る「縮小構造グループ (reduced-structure group)」の2つに分けられると主張する。複数動詞連鎖の特徴に関しては、複数動詞連鎖が2つの動詞を含んでいるにも関

ならず、いかなる理由で縮小構造グループが単節を成すのかを明示するために、4種類の個々の複数動詞連鎖を考察する。以下に、第1章の序章と第9章の終章を除く各章の論旨を述べる。

第2章は、複数動詞連鎖の研究の基盤となる章である。第3章以降の議論の展開を円滑にするために、5つの事柄、「コーパス方法論」、「連鎖補文 (catenative complement)」、「to不定詞と-ing形の時間的特性 (temporal property)」、「直示動詞 (deictic verb) come/goの先行研究」、「複数動詞連鎖の総分類のスキーマ(schema)」を示す。連鎖補文は、複数動詞連鎖を特徴づける文法機能であり、Huddleston and Pullum (2002)の定義に従い、その概観を示す。直示動詞 come/goは、複数動詞連鎖の第1動詞として中心的役割を担う動詞であるが、複数動詞連鎖の第1動詞としての先行研究はほとんどない。第3章以降の複数動詞連鎖の考察を行う前に、単独の直示動詞の先行研究を精査する必要があるため、Fillmore (1971)、Clark (1974)、Radden (1996)、Bourdin (2003)、そして Matsumoto (2013)を取り上げる。本稿独自の事柄は、コーパス方法論、to不定詞と-ing形の時間的特性、そして複数動詞連鎖の総分類のスキーマである。コーパス方法論では、従来使われてきた「コーパス例示手法 (corpus-illustrated technique)」と「コーパス基盤手法 (corpus-based technique)」に加えて、「コーパス確認手法 (corpus-corroborated technique)」を提案し、更に、共時的な考察と通時的な考察を組み合わせた新しいコーパス方法論としての「混合型 (hybrid)」を提示する。to不定詞と-ing形の時間的特性では、to不定詞と動名詞の先行研究を渉猟し、複数動詞連鎖の考察の上で重要な役割を担う独自のto不定詞と-ing形の時間的特性を示す。複数動詞連鎖の総分類のスキーマは、表1に示されているように、統語的観点と意味的観点の両方からの分類が基盤となり、4種類の複数動詞連鎖を考察する上で、必須要素となる。

グループ		複数動詞連鎖		V-to-V		V-and-V		V-V		V-Ving	
		*1	*2	語彙的 (lexical) VI	希薄的 (attenuated) VI	語彙的 (lexical) VI	希薄的 (attenuated) VI	語彙的 (lexical) VI	希薄的 (attenuated) VI	語彙的 (lexical) VI	希薄的 (attenuated) VI
完全統語構造	等位節 (coordinated clause)										
	連鎖補文										
	付加詞 (clausal adjunct)										
縮小構造	半補文 (semi-complement)										
	付加詞/斜格 (adjunct/oblique)										

表1 複数動詞連鎖の総分類のスキーマ *1は第1動詞の後ろの連鎖の文法的機能、*2は意味のサブタイプ

第3章は、統語的、そして意味的観点から the V-to-V sequence を考察する。The V-to-V sequenceには2つの特徴がある。1つは、完全統語構造グループと縮小構造グループの両方が、to不定詞の時間的特性を保持していること、もう1つは、完全統語構造グループの第1動詞の意味の希薄化が、

第1動詞が繰り上げ動詞 (raising verb) であることに、少なくともいくつかの動詞においては、その関係性がみられることである。

第4章は、統語的、そして意味的観点からの the V-and-V sequence の考察を通して、純粋に統語的制約と考えられてきた Ross (1967) の「等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint)」の例外を統語的、そして意味的観点から捉え直す。Lakoff (1986)と Deane (1992)により等位構造制約の例外は意味的観点を抜きに説明はできないとすでに示されているが、本稿では、更に一歩進み、Lakoff (1986)と Deane (1992)が扱わなかった現象も取り上げ、等位構造制約の例外には、統語的、そして意味的観点から「純粋な例外 (genuine exceptions)」と「見せかけの例外 (apparent exceptions)」の2種類があることを証明する。(6)に示される純粋な例外は、完全統語構造グループの「等位節タイプ (coordinated clause)」に属し、意味的制約を受ける特定の状況下でのみ成立するものであるのに対して、(7)と(8)に示される見せかけの例外は、縮小構造グループに属し、成立するために、意味的制約を受ける特定の状況下を必要としない。(7)は縮小構造グループの「半補文タイプ (semi-complement type)」、(8)は縮小構造グループの「付加詞/斜格タイプ (adjunct/oblique type)」に属する。

- (6) a. He went to the store and bought ten doughnuts.
- b. What did he go to the store and buy?
- (7) a. I've got to try and find that screw.
- b. The screw which I've got to try and find holds the frammiss to the myolator. (Ross 1967: 94)
- (8) a. He went and spoke to the manager.
- b. Who did he go and speak to?

Sag et al. (1985)は、等位構造制約の例外が、等位節のいかなる分析においても必ず問題になると指摘しているが、本稿では、等位構造制約の例外は、統語的、そして意味的観点からの捉え直しが可能であり、等位構造制約の例外に関する問題点を解決している。

第5章は、統語的、そして意味的観点から the V-V sequence を考察する。The V-V sequenceには、他の3種類の複数動詞連鎖とは異なり、屈折 (inflection)の制約で完全統語構造グループと縮小構造グループを区別することが可能となる the V-V sequence 特有の特徴がある。更に、the V-V sequenceの第1動詞は、移動動詞の come, go, run だけであることも the V-V sequence 特有の特徴である。

第6章は、共時的コーパス Collins Wordbanks Online (CWO)と通時的コーパス Corpus of Historical American English (COHA)を用いて、機能的、そして歴史的観点から、(9)-(12)に示すような、4つの意味的競合複数動詞連鎖 (semantically competing multi-verb sequences) を考察する。

- (9) a. He helped organize the party.
- b. He helped to organize the party.
- (10) a. I'll try to get you a new tomorrow.
- b. I'll try and get you a new one tomorrow.

- (11) a. Come have your dinner.
 b. Come and have your dinner.
 (12) a. Go get me a drink!
 b. Go and get me a drink!

意味的競合複数動詞連鎖とは、意味的観点から区別ができない、あるいは区別が非常に難しい2種類の複数動詞連鎖である。特に、第4章と第5章の考察は、(11)と(12)が示すような、意味的競合複数動詞連鎖の関係にある the *V-and-V* sequence と the *V-V* sequence の区別は、意味論的観点からはできないことを明らかにする。しかしながら、本稿では、機能的、そして歴史的観点からは、意味的競合複数動詞連鎖の区別が可能であることを証明する。CWO を用いた機能的観点からは、「屈折分類 (the analysis of inflectional categories) 」と「コーパス内の分野別頻度 (fields of discourse) 」が意味的競合複数動詞連鎖の区別を可能し、そして、COHA を用いた歴史的観点からは、現代英語の the *V-V* sequence は、文法化 (grammaticalization) とは関係がない歴史的発展 (historical development) を示していることを明らかにする。

第7章では、複数動詞連鎖の総分類を総合的に議論するために、4種類の複数動詞連鎖の残る1つの the *V-Ving* sequence を、統語的、意味論的、そして歴史的観点から考察する。The *V-Ving* sequence には、特徴が3つある。第1に、the *V-Ving* sequence は他の3種類の複数動詞連鎖と意味的競合複数動詞連鎖にならないことである。つまり、the *V-Ving* sequence と他の3種類の複数動詞連鎖とは、類似点が少なく、明確な境界線が引けることである。その明確な境界線が引けることに関連して、第2に、他の3種類の複数動詞連鎖では、縮小構造グループの意味のサブタイプは1つであることに対し、the *V-Ving* sequence では、縮小構造グループの意味のサブタイプの数が多いことである。最後に、第3は、the *V-to-V* sequence と同様に、完全統語構造グループと縮小構造グループの両方が、-ing 形の時間的特性を保持していることである。

第8章は、複数動詞連鎖の総分類が何を意味するのかを議論し、総合的に複数動詞連鎖が持つ特徴、そして、特に縮小構造グループが持つ特徴を明確にする。複数動詞連鎖の特徴に関しては、文法機能 (grammatical function) の「規則性 (regularity)」と「不規則性 (irregularity)」の観点から、完全統語構造グループと縮小構造グループを捉え直すと、完全統語構造グループは規則性を示し、縮小構造グループは不規則性を示す傾向がある。本稿では、完全統語構造グループの不規則性は、等位構造制約の例外であることを示す。実際に、完全統語構造グループと比べると縮小構造グループは不規則性を示すが、縮小構造グループの不規則性の中に、新たな規則性を見ることができる。つまり、縮小構造グループの不規則性は、新たな規則性を形成する。その新たな規則性が、縮小構造グループが持つ特徴でもある。縮小構造グループの規則性は、(13)-(15)に示す、3つの制約により説明される。

- (13) 統合性制約 (integrity constraint) :

縮小構造グループでは、語が第1動詞と第1動詞に続く語の間に介入できない。

- (14) 主語制約 (subject constraint) :

縮小構造グループでは、第1動詞と第2動詞が同じ主語を共有している。

- (15) 発生制約 (occurrence constraint) :

縮小構造グループの付加詞/斜格 (adjunct/oblique) タイプの複数動詞連鎖は、規則的な順序で発生する。その順序は、the *V-Ving* sequence, the *V-and-V* sequence, the *V-V* sequence, そして the *V-to-V* sequence である。

最後に、本稿が一貫して主張していることは、複数動詞連鎖に対する完全な統語的アプローチでは、完全統語構造グループと縮小構造グループを区別するには不十分で、意味的アプローチが不可欠であり、複数動詞連鎖の統語論は、意味論なしには十分に説明できないということである。また、意味的競合複数動詞連鎖については、意味論基盤の機能的、そして歴史的観点なしには説明が難しいということである。その結果、本稿は、複数動詞連鎖の意味論基盤の多角的アプローチの価値をなお一層明確にし、更に深い研究への道をも開くものと言える。

References

- Bourdin, Philippe. 2003. On two distinct uses of go as a conjoined marker of evaluative modality. In Roberta Facchinetti, Manfred Krug and Frank Palmer, eds., *Modality in Contemporary English*, 103-128. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Clark, Eve V. 1974. Normal states and evaluative viewpoints. *Language* 50.2: 316-332.
- Deane, Paul. 1992. *Grammar in Mind and Brain Explorations in Cognitive Syntax*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Fillmore 1971. *Santa Cruz Lectures on Deixis*. Bloomington, Ind.: Indiana University Linguistics Club.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George. 1986. Frame semantic control of the coordinate structure constraint. *CLS* 22.152-167.
- Matsumoto, Noriko. 2013. The historical development and functional characteristics of the *go-adjective* sequence in English. In Ritsuko Kikusawa & Lawrence A. Reid, eds., *Historical Linguistics 2011: Selected Papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*, 243-265. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Radden, Günter. 1996. Motion metaphorized: The case of *coming* and *going*. In Eugene H. Casad, ed., *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*, 423-458. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Ross, John Robert. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Sag, Ivan A., Gerald Gazdar, Thomas Wasow, and Steven Weisler. 1985. Coordination and how to distinguish categories. *Natural Language and Linguistic Theory* 3. 117-171.

論文審査の結果の要旨

氏名	松本知子
論文題目	Multi-verb Sequences in English: Their Classification and Functions

要 旨

松本知子氏の提出した論文は、英語の複数動詞連鎖 (multi-verb sequence) に関して、その性質を、統語的、意味的、機能的、そして歴史的観点から多角的に論じたものである。取り上げるのは、(1)-(4)に示す複数動詞連鎖である。

(1) V-to-V sequence: a. I like to put lots of ketchup on my fries. b. He went to see 'Twelfth Night'.

(2) V-and-V sequence: a. You'll have to wait and see what happens. b. He went and bought thirty doughnuts.

(3) V-V sequence: a. He helped organize the party. b. Go wash your hands.

(4) V-Ving sequence: a. My father always enjoyed playing golf. b. He went sobbing up the stairs.

提出論文の目的は、1)統語的・意味的観点からこれらの複数動詞連鎖の諸用法の総合的分類を行うこと、2)個々の複数動詞連鎖の統語・意味・機能的特徴を明らかにすること、の二つである。それを通して、「形が違えば意味が違ふ」というボリンジャーの仮説を検証している。以下、各章の内容を紹介した上で、その評価を行う。

第一章は上記のような論文の目的が示されている。続く第二章では研究の手法と背景が示される。研究手法としてはコーパスを多角的に用いて、機能的・歴史的分析を行う、としている。また、分類の枠組みが示されている。それは、1)副詞テストによって、文が複文 (完全統語構造) をなすか、単文 (縮約構造) をなすかで大きな分類を行ない、さらに、2)完全統語構造をなすものを、a)等位構造、b)連鎖補文構造、c)付加詞節構造の三つに分け、3)縮約構造をなすものを、a)半補文タイプ、b)付加詞・斜格語タイプに分ける、とする。さらに二つの動詞の意味的関係から、移動・目的、移動・様態などの諸タイプに分けられる、とする。また、論文でしばしば取り上げられる重要な概念 (特に連結補語 (catenative complement))、及び複数動詞連鎖に参加する動詞の語形 (分詞など) や頻出動詞 (come, goなどの直示動詞) の性質が議論されている。

これらの概念に基づいて、(1)-(4)の分析が展開されていく。第三章は、V-to-V sequence を考察する。この連鎖に関する先行研究が議論された後、本論文の分類のスキーマに従って、諸用法の分類が行われている。さらに、この連鎖の特徴が議論され、完全統語構造グループと縮約構造グループの両方が、to 不定詞の時間的特性を保持していることが指摘される。先行研究の記述と自分の研究が混在して議論されている点、また、完全統語構造と縮約構造の見分け方の基準についてぶれがある点が惜まれるが、おおむね妥当な分類と特徴付けがなされている。

第四章は、V-and-V sequence を考察する。完全統語構造の等位構造をなすものと、縮約構造の半補文タイプ、付加詞・斜格語タイプに属するものが区別される。さらに、Ross (1967) の「等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint)」の例外を、完全統語構造と縮約構造の違いから、純粋な例外と見せかけの例外に分けられるとする。二つの構造の区別に関して、andの発音の違いに注目しながら副詞テストを用いている点は興味深い。ただし、完全統語構造をなすものと縮約構造をなすものの関係について、さらに深い考察も可能であると思われるが、それがなされていないのは残念である。

第五章はV-V sequence を考察する。これは、他の複数動詞連鎖とは異なり、屈折の制約で完全統語構造と縮約構造を区別することが可能であるとする。更に、第一動詞が、移動動詞のcome, go, run だけであることも V-V sequence の特徴であるとする。

主査記載
氏名・印

松本 曜

第六章は、以上の三つの章の中でその意味的な違いが明らかにされなかったとする表現ペアについて、共時的コーパスCollins Wordbanks Onlineと通時的コーパスCorpus of Historical American Englishを用いてその違いを考察する。取り上げるのは、以下のものである。

- (5) a. He helped organize the party. b. He helped to organize the party.
 (6) a. I'll try to get you a new tomorrow. b. I'll try and get you a new one tomorrow.
 (7) a. Come have your dinner. b. Come and have your dinner.
 (8) a. Go get me a drink! b. Go and get me a drink!

著者はこれらについて、機能的、そして歴史的観点によってのみ、その特性の違いが明らかになるとしている。コーパスを通して明らかになったのは、二つの動詞で同じ語形の繰り返しを避けるという同一回避(horror aequi)の原則による差異、および、それぞれの連鎖が用いられるジャンルの異なる差異が見られることである。この章は、機能的・歴史的視点を取り入れている本論文の重要な章であり、示されたデータは著者の主張を支持している。ただし、たとえば、(5), (7)に示された文に関して、先行研究が指摘している意味的な違いについての考察が行われたならば、やや異なった展開が可能であったように思われる。

第七章では、残る一つの連鎖タイプ、V-Ving sequence を考察する。この連鎖では、縮約構造グループの意味のサブタイプの数が多いこと、また、完全統語構造と縮約構造の両方で、一部の例外を除いて、-ing 形の時間的特性が保持されていることを指摘する。

第八章は、複数動詞連鎖の総合的分類が何を意味するのかを議論し、複数動詞連鎖、特に、縮約構造を持つ特徴を明確にしている。完全統語構造は規則性を示し、縮約構造は不規則性を示す傾向があるが、縮約構造も一貫した特性を示すことから、不規則性の中に規則性があるとしている。すなわち、縮約構造には、統合性制約 (第一動詞と第二動詞の間に何も介在できない)、主語制約 (第一動詞と第二動詞が主語を共有する)、さらに、生起制約 (付加詞・斜格語タイプでは、規則的な順序で動詞が複数動詞連鎖に参加する) の三つを指摘する。このうち、生起制約は他のものと性質が異なり、同じような制約として扱うべきかには議論の余地があると思われる。

第九章ではまとめが示される。複数動詞連鎖に対する統語的アプローチのみでは、縮約構造グループの諸用法を区別するのに不十分で、意味的・機能的アプローチが不可欠であるとする。また、ボリンジャーの仮説も、意味の中に機能的な考察を含めるときにその正しさが明らかになるとしている。

本論文は大著であり、多くの先行文献を参考にしながら書かれており、その幅広さは評価できる。また、類似する表現の違いをあくまで追究する態度にも、評価できるものがある。弱点として、扱おうとした内容が広いために全体的なまとまりに欠けること、論旨に明快ではない点があること、諸用法の関係に関する考察が弱いこと、英語における方言差があまり考察されていないこと、例文で意図されている意味が不明な場合があることが挙げられる。しかしながら、本論文の幅広い考察と研究の実証性は、それらの弱点を上回るものであると言える。

以上から、本委員会は全会一致で、論文提出者 松本知子 が博士 (文学) を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	松本 曜	副査	教授	ハリソン リチャード
副査	教授	岸本秀樹	副査	准教授	田中真一
副査	大阪大学 言語文化研究科 准教授	早瀬尚子			